

教材5 「ニュース番組を使ったメディア・リテラシーワークショップ」

～メディア・リテラシー入門 「問い」を持ってメディアとつきあうために～

1 学習の目標

- ①私たちがメディア社会を生活していることに気づき、メディアについて学ぶ必要性を理解すること。
- ②メディアについて自律的に考えるための手がかり(基本概念、メディア研究モデル)について、理解すること。
- ③ワークショップという学びの場でメディア分析を経験して、基本概念を理解すること。

2 メディア・リテラシーが求められている背景

(1)メディア社会

メディア・リテラシーとは、市民がメディアに対する能動性を身につけ、メディアを使ってコミュニケーションをつくり出す複合的な能力である。そして、そのような力を育てる取り組みや教育活動をメディア・リテラシー教育と呼んでいる。テレビ、新聞、雑誌、インターネット、携帯電話、ゲーム、DVDなど多種多様なメディアからの情報が私たちの生活文化そのものとなっている現在、メディアを多面的に分析することを通して私たちが社会について思考し、発信していくメディア・リテラシーの学びは、生きていく上で欠くことができないと言っても過言ではないだろう。

というのは、私たちが社会について知っていると思っていることは、直接経験すること以外はすべてメディアからの情報に依っている。しかし、例えばテレビの映像はどんなに自然に見えても、選択と技法によって構成されたメディア作品である。だが、メディア作品がメディア企業の手を経て制作され、私たちの目の前に示されていることはあまり意識されていない。

日頃、子どもたちだけではなく大人でさえ「テレビでそう言っていたから」「インターネットにそう書いていた」と、メディアからの情報を自分たちの判断や行動の根拠にしているのを目にしたことはないだろうか。娯楽としてドラマを見ていても、そこで提示されている人間関係の結び方や女性や男性の生き方を自分自身と重

ねて、何かしら日常生活を送る「手本」にしていることはないだろうか。

また、子どもたちの好きなテレビコマーシャルでは、延々と女性や男性の特性や役割、さまざまな人種・民族的背景を持つ人びとに対するステレオタイプ(型にはまった画一的なイメージ)な見方が提示されている。テレビコマーシャルだけではなく広告は、私たちに何かしら商品やサービスを購入することを通して、「美しさ」「健康」「やすらぎ」「人とのつながり」「幸福」を得ることができるかのように、日常的に語りかけている。

しかも、このようなメディア作品は巨大なメディア産業のビジネスとして送り出され、時には社会や政治の動きとも深く連動している。また最近では、インターネットの世界と既存のメディアが、渾然一体となって社会の動きと相互作用を起している。

いま一度、メディアとのつきあい方を振り返ってみよう。

(2)メディア社会を生きる力として

近年、メディア・リテラシーについて一定の関心は高まっている。だが、よく耳にするのは、メディア・リテラシーは「情報を鵜呑みにしない」とか「正しい情報を取捨選択する」などの心がけや、ジェンダーステレオタイプなどの「ステレオタイプさがし」としての理解である。だが、メディア・リテラシー教育は、心がけを教える教育ではないし、「まちがいさがし」でもない。

メディア・リテラシー教育は、メディアは現実を映し出している鏡ではない、すなわち、「メディアは能動的に読み解かれるべき、象徴的な(あるいは記号の)システムであり、外在的な現実の、確実で自明な反映などではない」(レン・マスターマン著・宮崎寿子訳『メディアを教える クリティカルなアプローチへ』世界思想社、2010年、28頁)という理解に立ち、系統的かつ多面的にメディアを分析する方法を獲得することを通して、学ぶ者のクリティカル(多面的に考える、吟味するという意味で使用している)な思考力を育て、主体的にメディア社会を生きていくための学びである。

求められていることは、まず、私たちが一人の例外もなく「メディア社会」を生きていることを意識することである。そして、メディアからの情報を分析的に捉えることができるようになることである。さらに、分析的に捉えることを通して自分自身のものの考え方や価値観が、メディアとどう関わっているのかを見つめることができるようになることである。そのような学びを通して、メディアの消費者ではなくこの社会を形成する一員として、より望ましいメディア社会を形成していく主体となっていくことである。

ところが、日本では、公的な学校教育システムのもとで系統的なメディア・リテラシー教育はいまだに実施されているとは言えない。学校教育での実施はあくまで

個々の教員や教育委員会単位での個別の事例に留まっており、社会教育でもNPOなどが行なっている状況である。

しかし、日本の放送政策のなかでメディア・リテラシーについてまったく検討されてこなかったわけではない。デジタル化、多チャンネル化、報道による人権侵害の多発などを背景にして1990年代の終わりに数次にわたって、旧郵政省が中心になってメディア・リテラシーについて検討の場を設けた時期がある。それは、「放送分野におけるメディア・リテラシーに関する調査研究会」報告書(2000年6月郵政省)として結実している。そこでは、研究者・放送事業者・NPOなどが議論を重ねて「メディアとの関わりが不可欠なメディア社会における『生きる力』であり、多様な価値観をもつ人々から成り立つ民主社会を健全に発展させるために、不可欠なものである』という合意に達している。

報告書で示された捉え方にもとづいて、メディア・リテラシーを進めていく必要性は、現在もその意義を失ってははいない。むしろ、放送分野だけではなく、インターネットの爆発的な普及や新しいメディアが次々と生まれている現在において、メディア・リテラシーが対象とするメディアの範囲を拡張して捉えていくことが課題となっている。

(3)メディアについて人間の側から考える

2011年3月11日に関東、東北地方を襲った大地震、津波による未曾有の被害、東京電力福島第一原子力発電所の事故による地球規模の環境汚染というかつてない事態に直面して、私たちはテレビや新聞など主流メディアによる情報の選別とともに、必要な情報が伝えられていない事態が起こっていることに気づかざるを得なかった。

メディア社会をクリティカルに見ると、それは当然起こりうることなのだが、これまでよりもいっそう多くの市民がそのことに気づき、メディアとどのように関係を結んでいくのかを考え始めていると言えるだろう。

同時に、インターネットを通じて発信される「専門家市民」による情報と主流メディアからの情報の乖離にも目を向けることになった。その後、脱原発を求める市民の動きが、ツイッターやフェイスブックといった新しいメディアと連動するという社会現象を生み出すに至っており、メディアと能動的に向き合う重要性はいっそう認識されるに至っている。

しかし、主流メディアへの信頼が失墜する一方で「テレビや新聞の情報は信じられないけど、インターネットの情報は信用できる」という一面的な見方も出てきている。繰り返しになるが、すべてのメディアを対象にして使い手の側からクリティカルにメディアを読み解き、多面的に吟味する力を獲得する必要性がある。

3 メディア・リテラシーの定義／基本概念／メディア研究モデル

(1) 定義

メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションをつくりだす力をさす。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。

(鈴木みどり編著『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』、世界思想社、1997年)

定義に示されているように、メディア・リテラシーとは、メディア社会を生きる人間の尊厳に深く関わるコミュニケーション能力とその権利の中核をなすものである。メディアをクリティカルに分析する態度を確立していくことによって、私たちはメディアの側からメディアの視点で社会を見るのではなく、視点を転換して人間の側からメディアに接することになる。さらに、定義でも示しているようにメディア・リテラシーはメディアをクリティカルに分析する力を獲得することにとどまらない。メディアにアクセスすることや多様な形態でコミュニケーションを創り出す能動的な力を獲得することも含まれている。

(2) 基本概念(Key Concept)

基本概念は、メディアのさまざまな側面を表現したものである。ここでは、鈴木みどり編『最新Study Guideメディア・リテラシー入門編』(リベルタ出版、2013年)の基本概念を紹介する。基本概念とメディア研究モデルの詳しい解説については同書を参照してほしい。

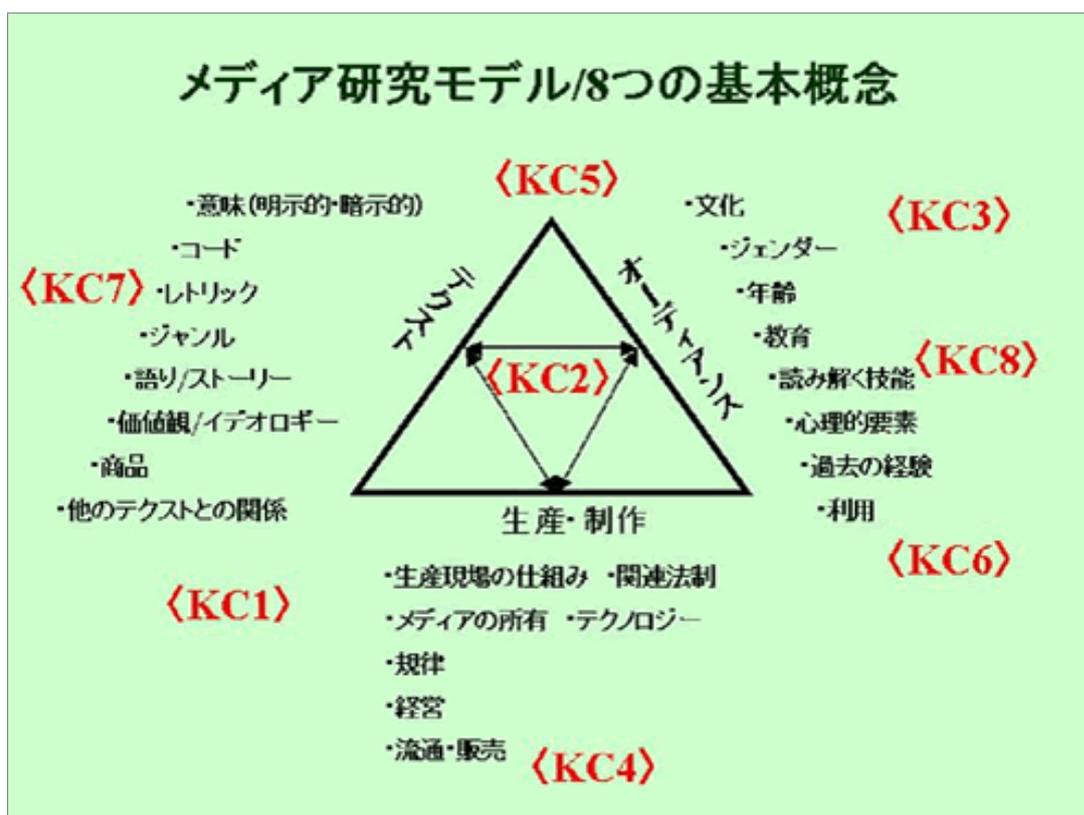
基本概念

- KC1 メディアはすべて構成されている
- KC2 メディアは「現実」を構成する
- KC3 オーディエンスがメディアを解釈し、意味をつくりだす
- KC4 メディアは商業的意味をもつ
- KC5 メディアはものの考え方(イデオロギー)や価値観を伝えている
- KC6 メディアは社会的・政治的意味をもつ
- KC7 メディアは独自の様式、芸術性、技法、きまり／約束事をもつ
- KC8 クリティカルにメディアを読むことは、創造性を高め、多様な形態でコミュニケーションをつくりだすことへとつながる

※この教材では、基本概念1、2を中心に据える。

(3) メディア研究モデル

メディア研究モデルは、テレビ番組や新聞記事、インターネットサイトなどふだん、私たちが「メディア」と捉えているものの背景には、それを生み出す制度や仕組みが存在していること(三角形の底辺の要素)、オーディエンス(視聴者、読者)の多様な要素(三角形の右辺の要素)、などがメディアについて学ぶ際に考慮に入れるべき要素であることを示している。



4 学び方

○ワークショップ

メディア・リテラシーの学びにおいては、学ぶものがメディアを意識化することが必要である。そのため、ここでは、具体的なメディア分析を行うワークショップを提案する。

○メディア分析を経験して「自ら発見する」

ワークショップという学びの場を創るものをファシリテーターと呼ぶが、参加者の発言を促して多面的な「気づき」を引き出すためには、対等な関係で対話を通して新しい発見をしながら学ぶことが重要である。→69頁、5(5)

5 ワークショップの組み立て方

テレビのニュース番組を使ったワークショップの組み立て方を説明する。ここでは、学ぶ者がニュース番組の分析方法を学んで、具体的に実証的なデータをつくって、それにもとづいて話し合いを進める。

ニュース番組を見て気づくのは、それが、「映像」と「音声」から構成されていることである。さらに「映像」は、人物や事物をさまざまな映像技法を使いながら構成されている。「音声」は、ナレーション、BGM、現場音などの音声技法を使いながら構成されている。

このようにメディアは、実社会の人びと、出来事、考え方などをそのまま提示するのではなく、映像、音声、文字などの記号を使いながら構成して再提示している（リプレゼンテーション）。

基本概念1「メディアはすべて構成されている」について、まず意識化するために、ニュース番組の一部(後述するように「今日1日の動き」など)を分析素材として使用しながら、映像、音声に着目しつつ、それらを「文字化」していく。映像を文字にする作業は、初めての参加者にとっては、難しく感じるかもしれない。しかし、実証的に、根拠を持ってメディアについて語っていく上では重要な作業のプロセスである。

(1) 準備するもの

①分析素材(テキスト)

- ・分析素材
- ・分析素材を上映するための機材、スクリーン

②ワークシート

- ・ワークシート12「構成の流れ記入シート」73頁
各参加者に1枚配布。
- ・ワークシート13「問いのシート」74頁
各参加者に1枚配布。
- ・グループ用のメモ用紙(A3の紙)、
- ・模造紙とマジック

③資料

説明資料として、メディア・リテラシーの定義、基本概念、メディア研究モデル(64～65頁)を配布してもよい。

(2)分析素材とワークシートの作り方

メディア・リテラシーにおいて分析素材は無尽蔵である。しかし、一人で分析素材(テキスト)を用意するのは非常に労力を要するので、できるだけ複数人で準備するとよい。準備の段階から学びが始まる。

分析素材

①特定の出来事を一斉に報じる日のニュース番組を録画する。年中行事化している日の夕方、または夜のニュースを複数局録画する(たとえば、1月第2月曜日の「成人の日」、5月5日「こどもの日」、6月23日「沖縄慰霊の日」、8月6日「広島原爆投下の日」、8月9日「長崎原爆投下の日」、「総選挙翌日の日」など。できれば全局を対象に録画をし、その際には番組開始から終了までを録画する)。

②録画した全番組を手分けして見て、「今日1日の動き」など各番組がその日の動きをまとめてレポートした部分があれば、それを複数選ぶ。年中行事化している番組を選択する理由は、その日のニュースでは「今日1日の動き」など凝縮して構成されている部分が放送される可能性が高いからである。分析素材の時間量は、多くても6、7分にするとよい。

ワークシート

では、意識化するための具体的な手だてとして、ワークシート12「構成の流れ記入シート」、ワークシート13「問いのシート」を用意するが、その作り方を説明していこう。

③ファシリテーターは自分で、ワークショップで分析素材にしようと思う番組の該当部分(「今日1日のドキュメント」など)を見ながら、時間の流れに沿って、映像と音声を、「構成の流れ記入シート」に書き出す。

ワークショップの際に使用する分析シートは、記入しやすくするためにセグメント(映像のひとつながり)ごとに区切る。

初めての参加者は、映像と音声の両方を短時間に記入するのは難しいので、音声データを書き入れておくとよい。

④ファシリテーターは、分析素材を準備する過程で、分析対象の「今日1日の動き」に登場する人物、事物、それを撮るカメラワーク(カメラの位置や動き)、色調、テロップなど映像を構成する要素、ナレーション、インタビュー、BGMなど音声を構成する要素に気づくだろう。これらの要素がすべて選択されて、どのようにして自然な流れに見えるように編集されているかに着目しよう。

(3)時間配分の例

- 自己紹介、進行の説明 (5分)
- メディア・リテラシーとは? (30分)
- ワークショップ「メディアは現実をどう構成するか～ニュース番組の分析から」
 - ・導入(分析素材やシートについて説明) (10分)
 - ・映像を見ながら個人による分析 (20分)
 - ・グループの話し合い (30分)
 - ・発表 (15分)
- まとめ (10分) 計2時間

(4)グループでの学習の進め方

テキストを見る前に

①ファシリテーターは、放送日時、放送局、選択した部分など分析対象について説明する。

ワークシート12「構成の流れ記入シート」を参加者に配布し、記入シートはグループでの話し合いに使用するためのもので、自分用のメモであり、自分の書き方でよいこと、完璧に書き取れないのが当たり前であることを説明する。

見ながら

②次に分析対象(分析素材)を参加者に、通して見せる。

③2度目は、セグメント(映像のひとつつながり)ごとに止めて、参加者が記入する時間をつくりながら見せる。

④書き取るのが難しいようであれば、3度目を見せる。あるいは、話し合いの途中で参加者から要望があれば見てもよい。

ここまでが個人による分析作業である。

見た後で

⑤次に、記入したワークシート12「構成の流れ記入シート」を持ち寄って、4～5人のグループをつくる。グループに分かれたら、ファシリテーターは、グループで簡単な自己紹介をした後に、「進行役」「記録役」「発表者」の役割分担をさせる。グループ分けや役割分担も話し合いを活性化させる要素である。

問い

⑥つづいて、ファシリテーターは用意した問い(ワークシート13「問いのシート」)を説明して、グループごとに話し合いに入るように促す。

参加者の人数にもよるが、おおよそ20分くらいをめどに発表に入ることを、あらかじめ参加者に伝えておくとよい。

⑦テキストがどのように構成されているか、各自が記入した分析シート(構成の流れ記入シート)を見ながら、次の点から分析してみよう。

どのような人物(性別/年齢/人種・民族的背景/社会的地位など)や事物が、どのような状況や順序で登場しているか。

⑧どのような映像技法(カメラワークや編集、色調、テロップの使い方など)や音声技法(ナレーションやBGM、効果音など)が使われているか。それらが映像にどのような意味を付け加えているか。

学びを深めるために

学びを深めるために、さらに次の問いに沿って話し合うこともできる。

⑨テキストはなぜ、このように構成されているのでしょうか。このニュースをめぐる政治・経済・社会・文化等の背景も考慮に入れて考えてみよう。

⑩このニュースでは取り上げられなかったことがあるか。あるとすれば、それはなぜ取り上げられないのか、考えてみよう。

グループでの話し合いの共有

⑪一定時間話し合った後に、グループから話し合った内容を全体に発表する。

グループごとに着目する観点が異なり、そのことから参加者は自分たちが気づかなかった点に気づくことができるだろう。また、オーディエンス(視聴者・読者)の多様性にも気づくことができるかもしれない。

研修時間に余裕がある場合は、グループごとに模造紙やマジックを使って発表準備をすると、より議論が深まる可能性がある。

(5)ファシリテーターの留意点

♪ テキストを自分たちで用意することを通して、ファシリテーター自らが分析素材の構成性について気づくことができる。もし、すでに用意された分析素材を使用する場合でも、必ず事前に「構成の流れ記入シート」を自分で記入して見る必要がある。

さらに、政治的・経済的・社会的・文化的な文脈について学ぶために、分析するニュースについて新聞記事やインターネットサイト、時間がある時は書籍などを通して背景となる情報や多面的な情報について学んでおくとよい。

ただし、ファシリテーターが学んだことについてワークショップが始まる際に多く語りすぎて、参加者の議論を「誘導」しないように注意することも大切である。

- ♪ ファシリテーターは、自分なりに分析をしてワークショップに臨むが、ワークショップではあくまでも参加者が主体的に学び、対話を通して新しい発見をするように進行する。その際に、「正解を求めるのではない」こと、メディアの「意図」を読むのではなく、あくまでも自分自身が分析データにもとづいてどのように「読み解く」のかが、メディア・リテラシーの学びにおいては重要だということを示唆することもできる。
- ♪ ワorkshopでファシリテーターは、可能な限り「教える者」ではなく参加者から学ぶ姿勢をもつことによって、話し合いを活性化させることが大切である。
- ♪ ファシリテーターは、グループの話し合いの際は、質問に答えたり、話し合いが活発ではないグループを訪問して、話し合いの糸口をつくる手助けをする。
- ♪ グループからの発表の際は、印象を語るのではなく実証的に分析をしているかどうかに着目して、実証的に分析をしているグループの発言をクローズアップすることで、重要な点を示唆することもできる。
- ♪ 参加者から、「なぜ、映像を文字化するのか」という質問をされるかもしれない。映像を文字化する理由は、メディアについて印象で話し合うのではなく実証的なデータにもとづいて、根拠をもって発言するためにそのような手順を踏むのである。このような経験が日常生活において、「なぜ、そのように言えるのか」「誰が語っているのか」「それは誰の利益につながるのか」「もっと言えることはないのか」「取り上げられていない点は何か」というような、「問い」をもってメディアに接する態度につながっていく。
- ♪ ファシリテーターにとってもっとも重要なことは、自分自身がメディア社会を生きる一員であり、メディアについて学ぶ必要性を自分の課題として捉えていることである。そのために、参考文献にある書籍を通して学ぶことやメディア・リテラシーのワークショップに参加して学びの経験を重ねることが、楽しく学ぶワークショップのファシリテーターになる近道である。

メディア・リテラシーワークショップでは、特に「アイスブレイク」を行う必要はないと思われる。なぜならば、個人の記入作業を終えるとグループに分かれて話し合うので、そこで自然に打ち解けることができる場合が多いからである。

6 今後に向けて～学びを深めるために

この教材では、主として基本概念の1と2について学ぶ組み立てを提案している。もちろん、メディア・リテラシーの学びはここで終わるものではない。

○提案している教材の他には、鈴木みどり『Study guide メディア・リテラシー ジェンダー編』（リベルタ出版、2003）、『最新Study guide メディア・リテラシー 入門編』（リベルタ出版、2013）を参照されると、より体系的な学び方を知ることができる。『最新Study guide メディア・リテラシー入門編』では、インターネットについてメディア・リテラシーのアプローチで学ぶ章を新設しており、ネット社会を分析する学びを提案している。

繰り返しになるが、インターネットについて学ぶ際にもメディア・リテラシーの基本概念や分析モデルを使用して思考を深めることができる。

○分析素材については、『スキヤニングテレビジョン日本版 メディア・リテラシーを学ぶためのビデオパッケージ』が役立つ。

(イメージサイエンス社販売 NPO法人FCTメディア・リテラシー研究所のサイト<http://www.mlpj.org/pb/index.shtml>から申し込むことができる)

これは、カナダで制作されたメディア・リテラシーを学ぶための映像教材から日本向けに厳選し、日本語訳をつけたものである。「ティーチング・ガイド」もついており、それぞれの教材をどのように使用するのか解説されている。

○NPO法人FCTメディア・リテラシー研究所では、インターネットサイトを運営しているが、研究プロジェクト(「子ども・若い人たちとメディア」「ジェンダーとメディア」「シニア市民とメディア」「メディア社会と市民」「メディア倫理」)ごとに研究成果や外部リンクを構成している。また、学びを深めるためのオリジナル教材や参考文献も紹介しているので、参考にしてほしい。

7 おわりに

メディア・リテラシーの学びはクリティカルなメディア分析を出発点とするが、それだけで終わるのではない。定義に掲げているように「多様なコミュニケーション」を創りだすことを目的としている。これは、私たち一人ひとりが社会を生きる一員として社会に対して発言していく力の獲得をめざしている。とりわけ、子ども・若い人たち、ジェンダー、高齢者市民、さまざまな社会的背景によって社会の周縁に追いやられているマイノリティ市民にとって、このような力の獲得は人間の基本的な権利の確立という意味でも重要である。

NPO法人FCTメディア・リテラシー研究所が協力して進めた「高槻メディア・リテラシープロジェクト」では、中学生を対象に体系的なメディア・リテラシーの授業を提供したがそこでは、メディア分析からメディア制作という組み立てでプログラムを進行した。

さらに、中学生の学びを応援するために平行して2日間の市民講座を企画・運営したが、1日目はメディア分析、2日目に「スキャニングテレビジョン日本版」を使いながらオルタナティブなメディア分析を行ない、そこで学んだ基本概念の理解をもとにしてグループで映像メディアの制作を行なった。わずか数時間のワークショップでメディア作品が出来上がるが、なによりも、参加者一人ひとりが「自分にも社会に対して発言したいことがあるし、それはできる」ということを学んだことに大きな意義があると思う。

みなさんもぜひ、メディア・リテラシーが誘う豊かな学びの世界に一步踏み出してほしい。

＜ワークシート12＞ 構成の流れ記入シート

メディアが構成する「現実」とは

テキスト： 放送日時__月__日 放送局 _____ 番組名 _____

	映像：	音声：
	場所、登場人物の性別・年齢・人種民族的背景・外見容姿・行動／カメラワーク、テロップ(テ)、色調など	ナレーションの性別・声のトーン、人物の発言内容、BGM・効果音・現場音など、インタビュー(イ)
	(例) スタジオ 女性アナウンサー(20歳代後半) グレー色のスーツ スタジオ全景からアナウンサーの顔のアップに 式典会場遠景から会場内にアップ 男性記者(40歳代) スーツではない	(例) いつもより低いトーンで 「本日、〇〇式が行われました」 ナレーション 男性 「〇〇式が行われたのは、、、」 高めの声で 「集まったのは、、、」

(c) NPO法人FCTメディア・リテラシー研究所

☆配布するシートは、例文を消し、書き込めるようにしてください。

☆A3判に拡大してください。

<ワークシート13> 問いのシート

メディアが構成する「現実」とは

●中心となる基本概念：

- ①メディアはすべて構成されている
- ②メディアは「現実」を構成する

○グループの問い

(1)テキストはどのように構成されているのでしょうか。各自が記入した分析シートを用いて、以下の点から分析してみましょう。

①どのような人物(性別／年齢／人種・民族的背景／社会的地位など)や事物が、どのような状況や順序で登場するか。

②どのような映像技法(カメラワークや編集、テロップの使い方など)や音声技法(ナレーションやBGM、効果音等)が使われているか。それらが映像にどのような意味を付け加えているか。

(2)テキストはなぜ、このように構成されているのでしょうか。このテキストをめぐる政治・経済・社会・文化的背景も考慮に入れて考えてみましょう。

(3)このテキストでは取り上げられなかったことがあるのでしょうか。あるとすれば、それはなぜ取り上げられないのか、考えてみましょう。

☆A3判に拡大してください。